

---

# ラストダンスのそのあとで

金本ちはや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストダンスのそのあとで

〔ZΠ-γ〕

N  
7  
7  
3  
0  
F

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

高校最後の文化祭は、静かに幕を閉じようとしていた。後夜祭に盛り上がるグラウンドで、里香はクラスメイトの侑二に声をかけられ……。若者たちの心は、恋に夢に大きく揺れる。フォークダンスとともに紡がれる、青春の調べ。

すでに陽は沈んだというのに、キャンプファイアに照りされ、あたりは真昼のように明るかつた。

文化祭のシメを飾る後夜祭。一般客が帰ったあと、グラウンドの中央ではキャンプファイアが焚かれ、生徒たちはそれを囲むように輪になってフォークソングを踊る。

最近ではあまり見かけなくなつた光景だが、里香の通うこの高校では今でも伝統行事として行われている。生徒たちの間に『古くさい』などの抵抗感はさほどなく、むしろ『やつて当然』といふ意識が強い。

流れている曲は『マイムマイム』。キャンプファイアの周囲では生徒たちが手を取り合ひ、たまに歓声を上げながら楽しげに踊っている。

里香は少し離れた場所に座り、その様子をぼんやりと眺めていた。その背中に、ふと声がかけられる。

「藤野、踊らないの？」

振り返ると、クラスメイトの梶原侑一が立っていた。

「さつきまで踊つてたんだけど、ちよつと疲れちやつて」

「ふうん」

「梶原くんは？」

「俺はやつと後片づけが終わつたとこ」

侑一は答えるながら里香の隣に腰を下ろした。

よく見ると、彼の着ている文化祭実行委員の黄色いTシャツは、重労働を物語るように汗でぐつしょりと濡れていた。

「そつか、お疲れ様」

「いえいえ」

里香のねぎらいに、侑一は軽く微笑んだ。

侑一とは、一年生の頃からずっと同じクラスである。最初の一年

間はそれでもなかつたが、一年生になつてから少しずつ話すようになつた。

明るく屈託のない侑一は、男子が少し苦手な里香にも親しみやすい存在だつた。一見すると調子に乗りやすいタイプのようだが、だれもやりたがらなかつた実行委員を進んで引き受けるなど、実は結構しつかり者なのだ。後先考えずにその場のノリだけで騒ぐ男子との違いが、里香が信頼を寄せる理由だつた。

「あ、そうだ」

侑一が何かを思い出したように声を上げた。

「自販機でジュース買つたら一個出てきたんだけど、一個飲む?」

田の前に差し出されたのは、紙パック入りのオレンジジュース。

「えつ、いいの?」

「どうぞどうぞ」

里香はしばしためらつたが、喉が渴いているような気がしたのも事実で、結局ありがたくいただきました。

「ありがとう」

「どういたしまして」

さつそくストローを取り出し、紙パックに差しこむ。ストローの先をくわえて吸いこむと、口の中いっぱいに甘酸っぱい味が広がつた。

「うお、酸つぺえ」

「さすが果汁百パーセント」

ひと口飲んでストローから口を離した。いつの間にか曲は『マイ・マイム』から次のものに移っていた。

曲の移行とともに、踊りの輪から何人かの生徒が抜ける。代わりのように、別の生徒たちが新たに加わつた。

里香は戻ってきた生徒たちのなかに友人たちがいるかどうか探しに、ひとりも見当たらなかつた。どうやら続けて踊つているらしい。よく体力が持つなあ、と密かに感心してしまつ。

「しつかし、あつという間だつたよなあ」

「え？」

唐突な咳きに思わず視線をやると、侑一は遠くを見つめるように田を細めた。

「いや、文化祭がさ」

「ああ」

里香は頷いた。

「そうだねえ」

「はじまつたばつかのときはさ、一日間もあんのかよって思つんだけど。終わつてみると、たつた一日間つて感じなんだよな」「うん、わかる」

勉強に追われる日常を忘れ、浮かれ騒いだ一日間。ほんのわずかな時間だからこそ特別で、終わつてしまつと切ないのだ。  
けれど、一昨年や去年よりもっと切なく感じるのは気のせいだろうか。

高校最後の文化祭。

本当に、まるで夢でも見ていたような気分だ。

「そういえば、さ」

「ん？」

「藤野つて大学どこ行くの？」

「あれ、言つてなかつたっけ？　M女短大だよ」

M女子短期大学は看護師の養成校として名高い。看護師を目指している里香は、一年生のときからそこを志望校に決めていた。

「……M、女短大？」

「うん」

「……女子大？」

「そうだけど」

「…………そつかあ」

なぜか侑一は、ひどく落胆したような顔をした。

「え、何？　あたし、気に障るよくな」と言つた？

「や、こいつの話。気にしないで……」

「…………」

そう言いながらも、彼は深々とため息をついた。

「そつかあ、女子大かあ……盲点だつたなあ」

「盲点つて?」

「つづん……おれてつきり、藤野つてＫ大とか行くのかと思つてた  
えつ、Ｋ大なんか無理だよ！ あそこ、めぢやくぢや偏差値高い  
し！」

「藤野つて頭いいじやん。それに嘉村かむらも行くつて言つてたしわ  
朝ちやんはね。だけどあたし、看護師になつたいんだ」

「看護師？」

侑一は驚いたように目を丸くした。

「うん。ずっと前から決めてたんだ」

里香は得意げに笑つてみせた。

「……すげえよなあ、藤野」

「なんで？」

「だつて、しつかり将来のこととか決めてるじやん」

「まだなれるかどうかわからんないよ？」

「それでもさ、自分の……ビジョントークの？ そつこいつのちや

んと持つてて……すげえよ」

「そんな 梶原くんだつて、学校の先生になるんだつて言つてた  
じゃない」

侑一は苦い表情を浮かべた。

「違えよ」

「何が？」

「教師になりたいつて……俺が望んだわけじゃないんだ」

里香は小さく息を呑んだ。

「……そつなの？」

「……俺んちつてさ、親父もおふくろも教師なんだ。死んだじいち  
やんもそつでさ。で、やっぱ親は俺にも教師になつてほしいわけ。  
だから一応、進路希望は『教師』にしてきたんだ」

侑一の口調は、今まで聞いてきたなかで一番静かだつた。淡々と

語る姿は、却つて彼の押しこめてきた感情の大きさを窺わせた。

里香は何も言わなかつた。いや、何も言えなかつた。

胸にこみ上げてくる思いはある。だがそれをどんな言葉にして伝えればいいのか、どんな風に声をかければいいのか、わからなかつた。

しばし沈黙が落ちる。

どちらもしゃべらうとはしなかつた。侑一はキャンプファイアを見つめ、里香は彼の横顔を見つめていた。

やがて曲が中盤を過ぎた頃、里香が口を開いた。

「梶原くんのしたいようにすればいいんじゃないのかな

侑一が振り返る。里香は彼の瞳をまっすぐ見据えた。

「他人事だから言えるのかも知れないけど……あたしはそう思う。したいことがあるならそれをすればいいし、したいことがまだ見つかっていないならこれから探せばいいんじゃないかな

「……でも」

「うん。簡単にはわかってもらえないと思う。けどやつてみる前からあきらめるなんておかしいよ。難しいかも知れないけど、それでもがんばってみて」

里香は一度言葉を切ると、励ますような笑顔を作った。

「あたしも応援するよ。だつて梶原くんの人生は、梶原くんのものでしょ？」

そつと肩を叩くと、侑一はなんとも不思議な顔をした。

泣き出しそうな、笑い出しそうな　どちらとも言いたい表情だつた。

だがそれを里香が曰にしたのは、ほんの一瞬のこと。侑一はすぐ

に俯いてしまつた。

「梶原くん？」

里香は慌てて顔を覗きこむとした。彼はふるふると首を横に振ると、『大丈夫』と小さく答えた。

「『』めん」

「ううん、あたしのほう……なんか偉そつ」と言ひちやつて  
「めんね」

しゅんとなつて謝ると、侑一が顔を上げた。

口元を押さえていたのではつきりしなかつたが、どうやら笑つて  
いるようだつた。目が少し潤んでいるように見える。

「ありがと」

小さな、けれども心のこもつたひと言。  
それを聞いた里香は、ようやくほほつとした。

「家に帰つたら、言つてみるよ」

「うん、がんばって」

どこか晴れやかな、決然とした侑一に、里香はガツツポーズをし  
てみせた。それを見て、侑一はふつと吹き出す。

「あつ、ひどおい」

「『めん』めん」

いつもの調子が戻つてきたようだ。もう大丈夫だろう。  
ふと、それまで流れていた曲が終わり、続いてアナウンスが響い  
た。

『今年も無事に文化祭が終了しました。皆さん、お疲れ様でした。  
三年生はいい思い出は作れましたか？ 一、二年生は来年もがんば  
りましょ。それではいよいよラストです。曲はもちろん『オ  
クラホマミキサー』』

アナウンスが切れ曲が流れ出すると、男女ペアの生徒たちが次々  
に踊りの輪へ加わりはじめた。

後夜祭のラストの曲は、必ず『オクラホマミキサー』と決まって  
いる。これは男女がペアになつて踊る曲なのだが、この高校では特  
別な意味を持つていた。

それは、片想いの相手と一緒に『オクラホマミキサー』を踊ると  
両想いになれる、という言い伝えだつた。

つまり、ラストの曲の相手に誘つのは好きだと告白する」とな  
だ。

もちろんイエスならば申し出を受け、ノーならば断る。今キャンプファイアを囲んで踊っているのは、できたてほやほやのカップルたちなのだ。

曲に合わせて踊る生徒たちは、だれもが恥ずかしげに笑っていた。見守る観衆からは口笛やひやかしの声が飛ぶ。

「もつラストかあ」

里香は少し羨ましい気持ちで踊っている恋人たちを見つめた。

「…………なあ、藤野」

「ん？」

振り返ると、やけに真剣な顔の侑一と目が合った。一瞬どきりとする。

すっと侑一が片手を差し出した。

「踊ってくれない？」

もう一度、さっきよりも大きく、里香の心臓が飛び上がった。それは、つまり。

「いやなら別にいいんだけど」

居心地悪そうに侑一は視線を逸らした。

里香はぽかんとしていたが、やがて口元を綻ばせた。  
なんだか頃うなじがくすぐったい。

今まで気づいていなかつた気持ちを新たに発見した。それはきっとずいぶん前からあつたもので、あまりにもぼんやりしていてわからなかつた。

けれど、やつと形を現した。

確かめなくともわかる、侑一が持つているものと同じ想い。

「喜んで」

手を取ると、侑一は驚いたように瞬いた。

里香は立ち上がった。侑一はしばらく呆けていたが、やがてあとを追つてくる。

彼も笑っていた。

「早く行かないと終わっちゃうよ？」

「そうだな」

手をつなぎ、踊りの輪へ向かつて走り出す。途端にこじわばゆい歓声が上がった。

里香は思わず手を振つてみせた。キャンプファイアが近づいて頬が熱い。

だがそれはきっと、炎のせいだけではない。

明日から、また日常の再開だ。これから受験勉強が本格的になり、こんな風に騒げるのは今日が最後になるだろう。

苦しいのは自分のため。望む未来を手に入れるため。

それもわかっているけれど、今はまだこの照れくさいような幸せに包まれていきたい。

この曲が終われば魔法は解ける。だからあともう少ししだけ。すべては、このラストダンスを終えてから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7730f/>

---

ラストダンスのそのあとで

2011年1月15日19時56分発行